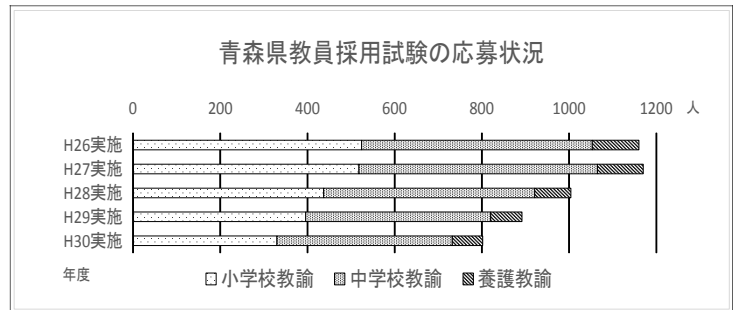


これからの学校教育を担う人材をつくる

次長 祐川 秀永

先日、県内の大学で教員養成に携わる先生とお話をする機会がありました。教師を目指す学生の様子について伺ったところ、以前に比べ今時の学生は、教師という職業にあまり執着することがなく、教育実習後には気持ちが変わり教師を目指すのをやめてしまったり、教員免許を取得しても他に条件にかなう仕事があればそちらへ就職したりする学生が増えているということでした。

県教育委員会のホームページに掲載されている教員採用試験の応募状況を平成26年度から今年度までの推移で見ると、平成27年度までは小学校教諭、中学校教諭、養護教諭の応募者数合計が1000人を超えていましたが、それ以降は年々減少してきている状況にあります。この



データからも教員志望離れが現実的に進んできていることがわかります。

教師の仕事にあこがれ、強い志を抱いて教壇を目指そうとする学生が、こここのところめっきり減っていることに大きな不安を覚えるとともに、教師を目指す人材をどのように確保すべきか、皆が真剣に考えるべき時が来ているのではないかと思います。

かつて教員志望者が今よりはるかに多かった時代、テレビドラマの主人公には教師が取り上げられ、人間味溢れる教師が子どもたちと真正面から向き合い、共に成長していく姿を描いた作品が数多くありました。ドラマに登場する教師の生き方、考え方に共感しあこがれ、教師を目指した人も少なからずいたように思います。教師を取り上げたドラマが最近少なくなったのは、今の時代の教師の存在感を反映しているのでしょうか。

キャリア教育の重要性が叫ばれて久しくなります。各学校では子どもたちが自分の生き方を主体的に考え、社会的、職業的な自立に向け歩を進めていけるように、実際にその職業で働く人から仕事を選んだ理由や仕事への思いを聞く機会を設けている様子が見られるようになりました。子どもたちの将来の職業選択のきっかけともなり得る重要な取組なのですが、その場面で教師自らが自身の仕事の面白さ、やりがいを子どもたちに伝える姿をこれまで見たことがありません。多分それは、この職業が毎日子どもが直に体感できる最も身近な仕事であり、あえて取り立てて説明するまでもないということなのでしょう。しかし、ここにきて、「働く大人としての教師」を間近に見続けてきた子どもたちが教師を目指さなくなってきたのは紛れもない事実です。

ある一人の新任教師と面談した際に「恩師のような教師を目指したい」と語っていたことが思い出されます。自分たちを思うさげない恩師の言動に心を動かされ、いつしか自分もそんな教師になって仕事がしたいと願うようになったそうです。このように教師の魅力は、子どものために夢中になって働く姿から滲み出て、日々の関わりの中で少しずつ子どもの心に蓄積されていくものなのでしょう。教員志望者が減っている今、これからの学校教育を担う人材を一人でも多くつくるために、生き活きと働く姿を見せていくことも私たち教師が果たすべき役割の一つではないかと強く考えさせられた次第です。

先生方と共に考えることの大切さ

～二つの事業への取り組みから～

主任指導主事 山本 明美

1 学校訪問について

(1) 計画訪問・要請訪問

今年度、計画訪問の他に、全町村立小・中学校への要請訪問の機会を与えていただきました。

そのことにより、ICT機器等の効果的活用を図ったり学び合いの場を工夫したりして授業改善に真摯に向き合っている先生方の努力、特別な配慮を必要とする子どもや学校不適應の子どもを支援し、その保護者と手を携えるために組織的に取り組む“チーム学校”の苦労を強く感じました。そして、「子どものために」という周囲の思いに支えられながら安心して学ぶ子どもの姿が印象的でした。

(2) 随時訪問

随時訪問は、5月から2月末までに、管内の小学校9校、中学校6校からのべ47回の依頼がありました。

最も多かったのは、講師や初任者を含めた教員の授業力向上に関わるもの(31回)であり、複数回の依頼をしていただいた学校もあります。教科領域も、5教科に関する授業スキルの向上はもとより、新学習指導要領の実施や移行期だからこそ理解を深めたいという要望により、道徳科や小学校の外国語・外国語活動に関する講義を含めた依頼もいただきました。

学校全体への指導助言というよりも、対象の先生と一対一に近い形で、共に考え話し合う場となったことで、不安や悩みを共有したり、より具体的な手立てや今後の方向性を示したりすることができたのではないかと思います。

また、例えば、集中力が持続するようになり動と静の切り替えもできるようになったという児童生徒個々の変容とともに、学ぼうとする学級集団へと変容している様子を見取ることができた随時訪問もありました。これは、子どもへの関わり方や授業技術などについて自己研鑽した先生自身の変容によるところが大きいのだと思います。訪問を重ねることができたからこそ見届けることが可能になったことだと再認識しております。

(3) 学校訪問総括

訪問させていただくことで、従来の説明や指導助言以外に教育事務所として何ができるのかを検討し、各学校や先生方が抱えている課題解決の糸口を、一緒に見付ける作業をさせていただきたいと考えています。

不登校や特別な配慮を要する児童生徒への組織的な対応等を含め、今後も様々なニーズに対応して参りますので、遠慮なく声をかけていただきたいと思います。



第三田名部小学校への随時訪問より

キャリア教育の充実に向けて

指導主事 伊藤 慎

平成31年度からスタートする「青森県基本計画『選ばれる青森』への挑戦」第3章「教育・人づくり分野」の施策の一つに「『生きる・働く・学ぶ』をつなぐキャリア教育の推進」が掲げられました。社会の仕組みが急速に変化し、今存在する職業の多くがなくなっていくと言われる未来。そのような未来を生き抜いていく子どもたちに、どのような資質・能力が必要なのかを明らかにし、キャリア教育の充実を図っていくことは、学校教育の重要な課題と言えます。

新学習指導要領とキャリア教育

新学習指導要領総則においては、児童生徒の発達を支える指導の充実として「キャリア教育の充実」が新設されました。

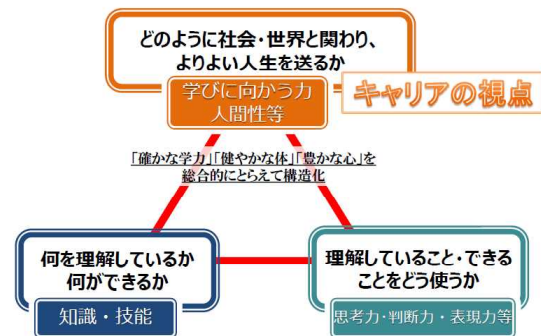
学習指導要領総則第4の1

- (3) 児童（生徒）が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としてつつ各教科等の特質に応じてキャリア教育の充実を図ること。

学習意欲の向上と「資質・能力」の育成

数学・理科の学習に対する生徒の意識調査（TIMSS 質問紙 2015）によると、「数学・理科の勉強が楽しい」「数学・理科を使うことが含まれる職業につきたい」などの質問に対し、肯定的な回答をした日本の中学生の割合が国際的に低い水準にあるという結果が出ています。また、ニートの学歴の高さを見ると、学生から社会人へのつながりがうまくできていないという課題が浮かびます。そこで、「学ぶこと」を「働くこと」や「生きること」に結び付け、学習意欲を向上させることがキャリア教育に期待されています。

また、新学習指導要領総則では、育成を目指す資質・能力として三つの柱を示し、バランスよく育成することとしています。（右図）この柱の中の「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力・人間性等）」は、キャリア教育の視点と重なるものと言えます。自校の児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にし、キャリア教育の視点で教育活動を充実させることが求められます。



各教科等での学びをつなぐ

総則では、特別活動を要にして各教科等での学びをつなぐ、キャリア教育の充実を図ることも新しく示されました。「要」は扇の骨を束ねた根元の部分になります。学級活動等で、これまでの学びや活動を振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うことが求められます。また、特別活動を通して各教科等で学んだことを実生活で活用できるものとし、子どもたちが自らのキャリア形成につなげていくことができるようにすることも大切です。



県では、児童生徒が自分の活動を記録し、学びを振り返るための教材として、「あおもりっ子キャリアノート『明日へのかけ橋』」を作成しています。県教育委員会ホームページからダウンロード可能です。各校で活用していただければと思います。

※アドレス (<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/kyariakyouiku.html>)

2 県学習状況調査等説明会について

(1) 下北管内の通過率

(単位：%)

小学校	国語	社会	算数	理科		全体
下北管内	61	53	52	65		58
県全体	63	56	58	67		61
下北と県の差	-2	-3	-6	-2		-3
中学校	国語	社会	数学	理科	英語	全体
下北管内	48	55	52	48	53	51
県全体	48	55	53	51	55	53
下北と県の差	±0	±0	-1	-3	-2	-2

(2) 冊子と説明会の変更

冊子『平成30年度学習状況調査 ー下北管内の分析と今後の指導ー』の冒頭ページに教育課長が「～省略～ 今年度は、従来の指導資料の分を除いて作成しました。これは、学校により差異があり、各学校の実態や要望に即した対応が必要だと考えたからです。」と述べておりますように、管内の集計結果と簡単な分析のみを記載し、あえて従来の四分の一程度の薄い冊子といたしました。指導例等は、すでに各校に配付済みの県教育委員会による『平成30年度学習状況調査実施報告書』に示されているものを十分に参考にしていただければと思います。

その代わりに、2地区で合計3回開催する説明会において、できるだけ各学校及び地区の実態に即した詳細な分析と授業改善の視点について具体的にお伝えすることが、多忙な中お集まりいただく先生方にとって役立てやすいのではないかと考えました。

当日は、校長等部会をもち、より詳細な分析結果をお示しすることにいたしました。同時に、中学校だけでなく小学校でも教科ごとの部会をもち、模擬授業での体験を通して、先生方に今後の授業のあり方について考えていただくという形に、大きく転換いたしました。



県学習状況調査等説明会「北通地区小学校」各教科部会より

(3) 県学習状況調査結果等説明会アンケート結果

①集計結果

(単位：%)

	冊子は参考になったか					各教科の説明は参考になったか			
	A	B	C	D	未入	A	B	C	D
町村小学校	60	35	1	0	4	86	14	0	0
町村中学校	76	24	0	0	0	85	15	0	0
合計	67	30	1	0	2	86	14	0	0

A(十分) B(おおむね十分) C(やや不十分) D(不十分)

②会の持ち方に関する意見

[北通地区]

- 県学習状況調査の結果から、地区で落ちている部分やその原因を示し、さらにその部分に関する効果的な指導方法や授業改善について説明があったので、具体的にどうすればよいか気付くことができた。
- 今年度の説明会の持ち方(一教科を集中して聞く)が、より日々の実践に生かせると思う。
- 子どもの立場で授業を受けると様々な発見をすることができ、有意義だと感じた。
- 小学校は全教科を担当するので、他の教科についても説明を聞きたかった。
- 各教科部会の説明や模擬授業の内容について、校内で共有する機会を設けられれば、さらに深められると思う。

[東通地区]

- 説明だけでなく、模擬授業を通して子どもにとっての分かりやすさと分かりにくさを体感することができ、授業について具体的にイメージすることができた。
- 小中の先生方が一緒に授業について考えることができ、どのような学習をしているのか系統性が見えるとともに、お互いのことを理解し合って今後の指導にあたることができると思った。
- 小中で分けて、その後合流する形ではどうか。
- 小学校は全教科を担当するので、他の教科についても説明を聞きたかった。

③県学習状況調査結果等説明会総括

先生方は、「子どもに力をつけたい」と日々授業を積み重ね、しかし、その成果がなかなか現れないことに悩んでいらっしゃいます。また、様々な対応に追われ、校内でじっくりと授業について語り合う時間が確保できない状況にもあります。

今回の説明会で、他校の先生方と情報交換したことや模擬授業を体験しながら気付いたこと、いつもと違う視点で自身の授業について振り返り明日の授業について考えたことを、目の前の子どもたちに還元していただければと思います。

3 最後に

学校訪問と県学習状況調査結果等説明会について総括することを通して、「学校と共にある下北教育事務所」であることの大切さを再確認しております。今後も諸事業について見直しを図るとともに、各学校の実態や希望に応じた対応ができるよう、指導主事一同日々研鑽に努めて参りたいと思います。

